規範決定の権限からみた運動部の構造の検討

——ソシオメトリーによる——

東 山 千鶴子・丹 羽 勲 昭*

(昭和42年 8 月 17 日 受付)

Examination of the Structure in terms of the Competence
of Decision of the Norm and the Goal in Athletic
Club, in the Sociometric Method

Chizuko Higashiyama and Takaaki Niwa (*Nara Women's University*)

We have been examining the structure in terms of the authority to decide the norm of the athletic group, which is a means of group analysis in order to effectively understand the relationships between the athletic group and its members' personality. We, in this present study too, examined the efficiency of the means, by comparing the sociometric structure and the structure in terms of the authority to decide the norm of the athletic group. The subjects are 275 in number, all of them are athletes from colleges and high schools in the Kinki District. This was done by questionnaire. The results are summarized as follows:

1. The structure in terms of the authority to decide the norm of the athletic group is of great use in analyzing the relationships between the actual leader and other members. This structure has a specially close connection with the captain's status index in his leadership and that of the faculty advisor and the coach in their 'discipline'.
2. Some of the relationships between the above-mentioned two structures are comparatively strong when viewed from the sociogram, whereas many others are very difficult to notice when viewed from other indexes.
3. Generally speaking, the structure in terms of the authority to decide the norm of the athletic group is of great efficiency when we examine the social aspect within the group, but it is of little use when we examine the personal aspect, especially emotional, within the group.

(Research Journal of Physical Education, No 1, Vol. 12, 8~16, 1967)

* 奈良女子大学 文学部 体育学研究室

緒 言

運動する人の集まりである運動部という集団は、部員の増大につれて次第に部員の位置や役割りが分化し、明確化してくるのが普通である。そして位置・役割りの認知や期待に基づいた行為がなされるようになると、お互いの行為の見通しも容易になり、部員間の関係が安定して、運動部の構造化が明確になつてくる。つまり、運動部員間に行為の交換が望まれるところに部員間の行為の関係が成立し、その複合・集積によつて機能的単位が形成されるとき、運動部が集団としての安定した構造と機能をもつことになる。

運動部の集団構造をとらえるということは、運動部員相互の複雑な活動の中から、部活動のある局面にそつて比較的安定した相互関係の型を見つけることであるから、明らかにすべき問題に応じて多くの立場から構造をとらえることができる。

こうした運動部の集団構造は、運動部が存在している全体社会への貢献と関係して重要であり¹⁾、また運動部自体の存続・発展の機能と関係して²⁾、さらに運動部員の行動やパースナリティと関係して³⁾ 極めて重要である。

われわれは、文化の内面化や内面化の過程においてパースナリティが形成されると考え、運動部はその形成過程で「場」あるいは「状況」を提供し、さらに作用するという考えから、運動部の構造や機能と部員のパースナリティの関係を研究してきたが、特に部員の態度と密接に関係する構造として、運動部の規範形成過程における規範決定の権限の所在からとらえた集団構造（以後、規範決定の権限からみた構造と呼び、権限構造と略称する）を問題としてきた。

すなわち、運動部の目標や規範がつくられる過程での規範の決定権が、部員外者にある部員外型、少教有力者にある主脳型（部主脳型と部員内主脳型に分かれる）、部員にある部員型の3～4構造型を抽出し、各構造型について、運動部自体を存続発展させる集団機能²⁾や部員のパースナリティ形成との関係³⁾を検討してきた。そして各構造型が特徴的な集団機能を持ち、また部員の態度形成とも密接な関係のあることを明らかにしてきた。

さて集団における成員の行動は、位置・役割りのような社会的認知の枠組みに大きく規定されると共に、個人的感情によつても影響される。したがつて、部員の行動や集団の活動を問題とすると、部員間の感情関係の分析もまた重要である。

そこで本論では、運動部の感情関係分析の方法として sociometric test^{注)}を用い、主に親和関係を基本にした運動部のソシオメトリー構造 (sociometric structure) と前述の規範決定の権限からみた構造とを比較・検討すると共に、リーダーとメンバーの関係からの検討も加えたい。

方 法

1. 調査の対象 大阪・兵庫・奈良の各府県下の8大学・3高等学校の運動部員で男・女275名(表1)。

2. 手続 上記対象について、昭和40年6月から7月にかけて運動部ごとに次のことを行なつた。

1) 運動部の目標と規範の形成過程の分析基準をもとに作成した質問紙によつて調査し、規範決定の権限からみた構造型を分類する²⁾。

注) Sociometry という概念は、広田⁴⁾も紹介しているように多様であるが、ここでは狭意にとり、Moreno 流の方法もしくはその変容を意味し、その中の一つの手法としての sociometric test の near type⁴⁾を用いた。また感情以外のリーダー・メンバー関係、コミュニケーション関係も同様の方法で調査した。

表 1 対 象

学 校	大 学				高 等 学 校				合 計				総 計	
性	男		女		男		女		男		女		男女	
運動部数 人数 運動種目	運動 部数	人数	運動 部数	人数	運動 部数	人数	運動 部数	人数	運動 部数	人数	運動 部数	人数	運動 部数	人数
サ ッ カ ー	1	14							1	14			1	14
バスケット ボール	3	41	3	35	2	29	1	15	5	70	4	50	9	120
バレーボール	3	44	4	45	1	10	2	42	4	54	6	87	10	141
合 計	7	99	7	80	3	39	3	57	10	138	10	137	20	275

表 2 ソシオメトリ構造の分析基準・項目・観点

基 準	項 目		観 点		(注)
	対 人 関 係 (選 択 基 準)	質 問 項 目	測 定 次 元	(測 定 法)	
リーダー・ メンバー関係	いうことに従う 人 格 的 尊 敬	C G	個 人 的 次 元 集 団 構 造 相 互 的 次 元	地 位 指 数 ソシオグラム C・G 項目における選択の一致度	
心 情	好 感 競 争 意 識	F E	集 団 的 次 元 相 互 的 次 元 集 団 的 次 元 集 団 構 造	選 択 者 指 数 相 互 的 選 択 傾 向 の 指 数 同 学 年 集 団 選 択 指 数 ソシオグラム	別 報 別 報
	親 友 関 係	I	集 団 的 次 元 相 互 的 次 元 集 団 的 次 元	選 択 者 指 数 相 互 的 選 択 傾 向 の 指 数 同 学 年 集 団 選 択 指 数	別 報 別 報

注) 別報とあるものは、紙面の都合上、別報で検討する。

2) A から I までの選択基準^{注)}を決め、
選択範囲を部内の人(監督, コーチ, 部の先
輩, 部員)に限定し, 選択数を3名以内として
順位をつける選択方法で sociometric test を行
なつた。その結果を, 表2に示すソシオメトリ
ー構造の分析基準・項目・観点にしたがつて分

析し, 二つの構造を比較・検討する。

結果と考察

1. 規範決定の権限からみた構造型の分類
規範形成過程における規範の決定権の所在に
よつて, 各運動部の構造を分類した結果を表3

注) 選択基準(質問項目)は9つであるが, 本論では紙面の都合で5選択基準の結果のみとりあげて
いる。

A一役割り上行動を共にする人
C一いうことに従う人
E一競争意識をもっている人
G一人格的に尊敬している人
I一親友と呼べる人

B一運動技術の指導をしてくれる人
D一技術的に尊敬している人
F一好感をもっている人
H一気軽に話し合える人

表 3 各運動部の規範決定の権限からみた構造型分類

規範形成過程における決定権の所在	構 造 型	大学運動部名	高校運動部名
部 員 外 者 (監 督・コーチ・部 長)	部 員 外 型	⑧ ⑨	⑤ ⑥ ⑦
部 員 外 者 と 部 員 内 主 脳 者	部 主 脳 型	① ② ③	④
部員内主脳者 (キャプテン・マネージャー・上級生)	部員内主脳型	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	⑦
部 員 全 体	部 員 型	⑧ ⑨ ⑩	⑪

注) ○……男子運動部 ○……女子運動部

図 1 規範決定の権限からみた各構造の特徴

に示す。また、権限構造型の特徴を分り易くするため、規範の決定者とその規範の伝達方向を図示すると図1のようになる。

表3と図1から、本研究の対象となつた運動部は、大学では部員内主脳型が、高校では部員外型が多いことがわかる。このことから対象となつた大学の運動部では、規範の決定権をキャプテンや上級生が、また高校では監督やコーチが持っているところが多かつたことになる。

2. ソシオメトリー構造の分析および両構造の比較・検討

ソシオメトリー構造の分析基準(表2)にしたがつて整理した結果を順に示す。

1) リーダーとメンバー間の関係について

C項(いうことに従う)とG項目(人格的尊敬)の2項目について、役割り別に各成員の地位指数を求め、個人的次元から検討するための資料が表4である。表4のC項目における各リーダーと権限構造型間の地位指数について、2要因の分散分析をした結果を表5に示す。その結果、リーダー間に有意差が認められたので、

リーダー対間の有意差検定をした結果が表6である。また監督・コーチの地位指数の権限構造型間の有意差検定をした結果が表7である。

表5から、C項目の地位指数は、リーダー要因にのみ有意差が認められたので($P<.01$)、リーダー対間の有意差検定をした結果(表6)、キャプテンの地位指数は監督・コーチや特定の部員より高く($P<.001$)、運動部におけるキャプテンの実質的な支配力の強さを示している。一方、監督・コーチの地位指数では権限構造型との対応が考えられる(表7)。すなわちC項目では、部員外型は部主脳型と有意な差はなく、部員内主脳型や部員型より高い傾向がみられ(但し4構造型間で $P<.10$)、監督・コーチの支配力は、部員外型から部主脳型、部員内主脳型、部員型となるに従つて次第に弱くなるという予想と比較的一致している。

G項目(尊敬)の監督・コーチの地位指数は、部員外型>部員型>部主脳型>部員内主脳型の関係がみられ($P<.01$)(表4.7)、部員型に高い指数がみられたのは興味がある。すなわち運動部を事例的にみていくと、女子運動部では、部員内主脳型や部員型のように監督・コーチが部生活にあまり関係しないところでは、監督・コーチへの人格的尊敬が高くなり、部員外型や部主脳型のように強く関与する部では、反対に監督・コーチの人格的尊敬が低くなつていく。男子運動部では、この関係が全く逆で、監督・コーチの関与する部では高く、関与しないところでは低くなる。つまり、部員が男と女では、監督・コーチの関与の強さと人格的尊敬と

表 4 規範決定の権限からみた構造型の各運動部における役割り別の地位指数

構造型	運動部	成員数	C——いふことに従う			G——人 格 的 尊 敬		
			監督, コーチ	キャプテン	特定の成員	監督, コーチ	キャプテン	特定の成員
部 員 外 型	①	21	.67	.72	.28	.14	.47	.23
	②	14	.57	.59	.21	.26	.38	.05
	③	10	.60	.74	.19	.43	.70	.22
	④	15	.36	.93	.14	.07	.41	.12
	⑤	21	.67	.68	.10	.29	.43	.30
	平均	16.2	.57	.73	.26	.24	.48	.18
部 主 脳 型	①	11	.97	.47	.37	.27	.10	.50
	②	10	.20	1.00	.30	.18	.11	.44
	③	21	.17	.80	.38	.10	.15	.68
	④	10	.20	.85	.33	.16	.78	.44
	平均	13.0	.39	.78	.34	.18	.28	.51
部 員 内 主 脳 型	①	13	.31	.72	.36	.0	.58	.20
	②	11	.27	.93	.33	.0	.37	.60
	③	12	.25	.85	.36	.18	.33	.09
	④	15	.42	.45	.17	.12	.17	.31
	⑤	10	.23	.81	.48	.0	.55	.52
	⑥	13	.41	.61	.19	.16	.36	.50
	⑦	14	.09	.82	.38	.0	.31	.23
	平均	12.6	.28	.73	.32	.07	.41	.35
部 員 型	①	9	.30	.96	.50	.44	.50	.08
	②	21	.0	.74	.32	.18	.53	.33
	③	9	.26	.71	.21	.11	.04	.50
	④	15	.13	.14	.90	.07	.19	.76
	平均	13.5	.17	.64	.48	.20	.31	.42

注) C.H. Proctor らによる $C \cdot S = \frac{\sum Cr}{N-1}$ を参考にして, 選択数 = 3 の場合の重みづけ (第 1 選択 = 3 点, 第 2 選択 = 2 点, 第 3 選択 = 1 点) を考慮した次式 $C_3S = \frac{\sum(3x_1 + 2x_2 + x_3)}{3(N-1)}$ を用いて算出した (なお, x_1 —第 1 選択, x_2 —第 2 選択, $C \cdot S$ —選択地位, $\sum Cr$ —受けた選択総数 N —成員数).

表 5 C 項目 (服従) における各リーダーと権限構造型間の地位指数の分散分析

変 動 因	平方和	自由度	平均平方	F
リ ー ダ ー	2.3608	2	1.1804	29.85**
構 造 型	0.0670	3	0.0223	< 1
交 互 作 用	0.1089	6	0.0182	< 1
誤 差	2.3724	60	0.0395	
全 体		71		

(**.....1%)

表 6 C 項目における各リーダーの地位指数間の有意差検定

リ ー ダ ー	キャプテン	監 督	特定部員
リ ー ダ ー			
キャプテン	—	***	***
監 督		—	なし
特定部員			—

注) 1. 検定は Ryan の法による⁶⁾
2. ***.....0.1%

表 7 権限構造型間における監督・コーチの地位指数の有意差検定

項目	検定 4 構造型 間の F 検定	構造型対間の t 検定				
		型	外	主	内	員
C (いうに従う)	$F_0 = 2.66$ $P < .10$	外 主 内 員	—	なし	**	**
G (人尊 格的敬)	$F_0 = 9.1$ $P < .01$	外 主 内 員	—	**	**	**

- 注) 1. t 検定では α の有意水準を Ryan の法で名義水準に修正した⁶⁾
 2. *.....5% **.....1%
 3. 外...部員外型 主...部主脳型
 内...部員内主脳型 員...部員型

の関係が逆に現われ(表4), 男女の考慮も重要なことを示唆している。

いずれにしても, C・G 項目の監督の地位指数と権限構造型とは強い関連が認められる。

表4の地位指数をもとに, 各運動部についてリーダーとその他のメンバー間の服従と尊敬の関係の特徴的な構造を図示したのが図2である。

ここでは五つの特徴的構造がみられた。図2からリーダーとメンバー間の関係が権限構造型と類似した傾向を示したのは, C項目(服従)

図 2 リーダーと他のメンバー間の「服従」「尊敬」における関係の特徴

- 注 { ①...部員外型 ②...部主脳型 ③...部員内主脳型 ④...部員型
 ⑤...監督・コーチ ⑥...キャプテン ⑦...特定の部員組立 ⑧...の数字は
 番号を示す

では部主脳型以外の三つの構造型であり, G項目(尊敬)では部員内主脳型のみである。つまり社会的なリーダー・メンバー関係では, 権限構造型はソシオメトリの結果と比較的關係が

表 8 規範決定の権限からみた各構造型のリーダーにおけるC(服従)・G(尊敬)項目選択の一致度

構造型	運動部	成員数	一 致 度		
			監督 コーチ	キャプテン	特定の成員
部員外型	①	21	.17	.55	.18
	②	14	.19	.42	.12
	③	10	.48	.78	.55
	④	15	.0	.62	.35
	⑤	21	.35	.47	.43
	$\bar{x}$	16.2	.238	.568	.326
部主脳型	①	11	.27	.23	.74
	②	10	.0	.10	.63
	③	21	.0	.05	.31
	④	10	.22	.84	.48
	$\bar{x}$	13.0	.123	.305	.540
部員内主脳型	①	13	.0	.48	.29
	②	11	.0	.66	.38
	③	12	.66	.44	.22
	④	15	.20	.24	.36
	⑤	10	.0	.77	.78
	⑥	13	.25	.44	.63
	⑦	14	.0	.40	.47
	$\bar{x}$	12.6	.159	.490	.447
部員型	①	9	.60	.58	.14
	②	21	.0	.56	.50
	③	9	.20	.14	.47
	④	15	.0	.0	.79
	$\bar{x}$	13.5	.200	.320	.475

注) 一致度は次式を考案して算出した。ただし第3選択までをとった。

$$\begin{aligned}
 \text{一致度} &= \sqrt{\frac{\text{CG項目一致数}}{\text{C項目における被選択総数}} \times \frac{\text{CG項目一致数}}{N}} \\
 &= \frac{\text{CG項目一致数}}{\sqrt{N (\text{C項目における被選択総数})}} \\
 &= \frac{N - \text{成員数}}{(\text{CG項目一致数} - \text{CGの両項目で選択者が一致している数})}
 \end{aligned}$$

あり、心理的な関係では殆んど関係がみられない。運動部全体の傾向としては、部内の1～2名がリーダーとなっており、3名以上がリーダーとなつてゐる部はみられない。

そこで規範伝達における行動（外面）と感じ方（内面）の状態を、CとG項目との選択の一致度からみたのが表8である。つまり、C項目におけるリーダーは、役割りや位置に規定された社会的な強制力をもつリーダーと考え、G項目におけるリーダーは、自分から尊敬するために従うところの自発的な心理的強制力をもつリーダーと考えた。したがつて、両者の一致する程度の高い集団程、社会的な関係と心理的な関

係とが、うまく一致している集団と考えることができよう。

各運動部についてC・G項目の一致度の高いリーダーをみると、部員外型ではキャプテンに多く、部主脳型では特定の部員に、部員内主脳型ではキャプテンまたは特定の部員に多く、部員型では一定の傾向がみられない。また、一般に監督・コーチの一致度は他のリーダーの一致度より低く、この対象に関しては、監督・コーチがリーダーとなることはあまり適当ではないということになる。

2) 心情について

F項目（好感）、E項目（競争意識）は、感

表9 規範決定の権限からみた構造型ごとの選択者指数の平均値

構造型	選択基準 合計人数	F 好 感		E 競 争 意 識		I 親 友	
		第1選択	第3選択	第1選択	第3選択	第1選択	第3選択
部員外型	81	.91	.71	.85	.58	.72	.44
部主脳型	52	.98	.76	.74	.51	.57	.26
部員内主脳型	88	.92	.81	.71	.52	.66	.34
部員型	54	.90	.79	.81	.53	.72	.38

注) 各部でどの程度の部員が、第1選択および第3選択をしているかをみる指数で、次式によつて算出した。

$$C_1I = \frac{\text{第1選択をした部員の数}}{N} \quad C_3I = \frac{\text{第3選択をした部員の数}}{N}$$

(C_1I —第1選択者指数 C_3I —第3選択者指数 N —部員数)

表10 規範決定の権限からみた構造型とソシオグラムの特徴 (F, E項目)

項 目	ソシオグラムの特徴 構造型	最上級生の1人に集中し、他は全体に分散する	最上級生の3人に集中する	上級生に分散する	全体に分散する
F (好 感)	部 員 外 型			① ② ③ ④ ⑤	
	部 主 脳 型	①	② ③	④	
	部 員 内 主 脳 型	①		② ③	④ ⑤ ⑥ ⑦
	部 員 型	①		②	③ ④
項 目	ソシオグラムの特徴 構造型	特定の成員に集中し、他は分散する	特定の成員に集中し、他は相互結合する	分団分離し、その中で相互結合する	全体に分散する
E (競争意識)	部 員 外 型	① ② ③		④ ⑤	
	部 主 脳 型	①		② ③	④
	部 員 内 主 脳 型	⑤	① ② ③ ④	⑤ ⑥	⑦ ⑧ ⑨
	部 員 型		① ② ③ ④	⑤	⑥ ⑦ ⑧

情的な選択基準における部員間の関係をみようとしたものである。Dimock の「友好指数^註」と同じ考え方から、部内の好感や競争意識等の程度を知るため選択者指数を求めて表9に示し、ソシオグラムの特徴を権限構造型ごとにみた結果を表10に示す。

表9から、部員間で好感をもつ部員の数の比率（選択者指数）は、権限構造型による差がみられないし、競争意識についても同様にみられない。対象とした運動部では、10人から20人程度の部員であつたが、一般に選択者指数には差異がなく、また部員数10人から13人程度の運動部では、F項目（好感）で高い値をとる部はE項目（競争意識）でも比較的高い値をとる傾向があるように思われる。これらのことから、心情に基づく選択者指数は権限構造型には関係なく、他の要因が関係すると思われる。

つぎに表10から、ソシオグラムの特徴を権限構造型別にみる。

まずF項目（好感）では、全般的に上級生に好感が集まる傾向があり、特に部員外型と部主脳型ではその傾向が著しく、部員内主脳型と部員型では全体に分散する傾向が多くなり、権限構造型と関連があるように思われる。すなわち部員外者の力が強く働く構造型では、好感は一般に上級生に集まり、部員が強い力をもつ構造型では、部員全体に好感が分散する傾向にある。したがって運動部の規範形成における力の関係が上→下（上級生→下級生）関係にある集団構造では、好感は下から上に向かい、水平（全体の部員間）関係にある集団構造では、好感も全体に分散する傾向があり、両構造間の関連が推察される。

E項目（競争意識）では、部員外型と部主脳型が、特定の部員に競争意識が集中する部（スターがいると思われる部）と学年ごとに相互選択している部（学年による規定の強い部）に分

かれる。部員内主脳型では一部の特定部員に集中する（スターのいる部）か、または相互結合する傾向がみられ（学年による規定は殆んどない）、部員型では特定部員への集中はみられず（スターがいない）相互結合かまたは分散する傾向がみられる。

以上のことから、心情に基づくソシオグラムの構造と権限構造とは比較的関連が強いと思われる。それを要約すると、部員外型と部主脳型では、下級生から上級生に心情の流れがみられ、部員内主脳型と部員型では、部員相互間に流れるかまたは全体に分散する傾向がみられる。したがって感情的側面からは、権限構造の分類の際、規範の決定に部員以外の者が力をもつか否かという基準による分類の方が、規範の決定者が部内の少数有力者（主脳者）か部員全体かという基準で分類するより、より有効であると考えられる。

I項目（親友関係）は、最も緊密な次元での対人関係としてとりあげたが、権限構造型による差はみられない（表9）。

総 括

1. 対象となつた運動部を規範決定の権限からみた構造型で分けると、大学ではキャプテンや上級生が決定権をもつ部員内主脳型が、高校では監督・コーチが決定権をもつ部員外型が多くみられる（表3、図1）。

2. リーダーとメンバーの関係について、ソシオメトリ構造でみた現実のリーダー（いうことに従う）や心理的リーダー（人格的尊敬）が、権限構造におけるリーダーと同一成員の場合はキャプテンに多く（図2、表4）、またC項目（服従）におけるキャプテンの地位指数は他のリーダーより高い（表4、5、6）。これらから、キャプテンの支配力の強さと位置・役割りの重要性がうかがわれる。

注) Dimock, H. の「友好指数」(friendship index) は、各成員が自己のクラブ内で10名の親友の名前をあげるようにいわれた時、あげた選択数をそのクラブ内での可能な選択数で割った比率として作ったものであるが、選択者指数も同じ考え方から算出した。式は表の注に示している。

また権限構造型は、現実的なリーダー・メンバー関係と密接に関係するが、特に監督・コーチの「服従」(C項目)「人格的尊敬」(G項目)の選択基準における地位指数との関連が強い(服従: 外 $\approx$ 主, 外 $>$ 内 $\approx$ 員, 尊敬: 外 $>$ 員 $>$ 主 $>$ 内)(表4, 7)。

社会的リーダーと心理的リーダーの一致の程度をみるC・G項目の一致度で高い値をとるリーダーは、部員外型はキャプテン、部主脳型は特定部員、部員内主脳型はキャプテンまたは特定部員に多く、部員型では一定の傾向がみられない。また各型に共通して監督・コーチの一致度が他のリーダーより低い(表8)。

3. 心情関係について、「好感」(F項目)「競争意識」(E項目)の選択基準でみると、部員の中でこれらの心情をもつ程度を運動部単位で示す選択者指数値は、権限構造型による差は認められない(表9)。ソシオグラムの特徴では権限構造型との関連がみられる。すなわち「好感」では、部員外型と部主脳型は下級生から上級生に心情の流れがみられ、部員内主脳型と部員型は部員相互間に心情が流れあうか、または全体に分散する傾向がみられる(表10)。「競争意識」では、部員外型と部主脳型は特定部員への集中と学年ごとの相互選択が、部員内主脳型では特定部員への集中か相互選択(学年による規定なし)がみられ、部員型では特定部員への集中はみられない(表10)。

4. 最も緊密な関係である親友(I項目)の選択基準では、権限構造型による差はない。また親友をもつ部員の数の多少も権限構造型とは関係がみられない(表9)。

5. 権限構造をソシオメトリーから検討した結果、一般に社会的な選択基準に基づくソシオメトリー構造は、権限構造と強い関連がみられ、権限構造による集団内の社会的側面の分析の有効性と妥当性の一部を証明している。しかし、心理的な選択基準に基づくソシオメトリー構造では、両者間に関連のあるものと全くないものとに区別される。また両構造の関連から、権限構造型の分類の際、規範の決定に部員外者が関与するか否かによる2分法が重要な基準となると考えられる。

引用文献

- 1) 影山健(1961): スポーツ集団の研究の意義と方向. 竹之下・磯村編「スポーツの社会学」大修館, 129~131.
- 2) 竹村昭・丹羽劭昭(1965): 運動部集団とパースナリティの関係について(Ⅰ), 体育学研究, 9: 2, 9~17.
丹羽劭昭(1966): 運動集団の構造と機能, 奈良女子大学文学会研究年報, 9, 93~115.
- 3) 丹羽劭昭・竹村昭(1966): 運動部集団とパースナリティの関係について(Ⅱ), 体育学研究, 11: 1, 1~8.
- 4) 広田君美(1963): 集団の心理学, 誠信書房, 89~105.
- 5) 田中熊次郎(1964): ソシオメトリーに関する問題とその考察, 心理学研究, 35: 5, 252~253.
- 6) 岩原信九郎(1960): 教育と心理のための推計学, 日本文化科学社, 241~243.
- 7) Cartwright, D. and Zander, A. (eds.) (1958): Group Dynamics: Research and Theory. New York: Row Peterson, 74.